

容器包装に関する基本的な考え方について

一般廃棄物の大宗を占め、かつ、再生資源としての利用が技術的に可能な容器包装について市町村による分別収集及び事業者による再商品化等を促進するシステムを構築し、もって廃棄物の適正な処理及び資源の有効な利用の確保を図るため、「容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律」が平成7年6月に公布され、また、その施行のための政省令が同年12月に公布されたところである。

本資料は、このうち、省令（容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律施行規則 平成7年大蔵省、厚生省、農林水産省、通商産業省令第1号）第1条及び第4条に関連し、特定事業者が再商品化の義務を負うこととなる容器包装の範囲等について、基本的な考え方を示したものである。

I 容器包装リサイクル法の対象となる「容器包装」に該当するか否かの判断の目安

1 法律上の定義及び効果

(1) 定義

この法律において「容器包装」とは、商品の容器及び包装であつて、当該商品が費消され、又は当該商品と分離された場合に不要となるものをいう。（法第2条第1項）

(2) 効果

容器包装リサイクル法上の「容器包装」に該当すると、基本的には、消費者が分別排出し、市町村が分別収集し、事業者が再商品化を行うという同法の体系の範疇と位置付けられる。（ただし、これらの責務が具体的に発生するのは、市町村が実際に分別収集を行う容器包装区分に該当する場合のみ。）

2 具体的判断の目安

容器包装リサイクル法の対象となる「容器包装」に該当するか否かは、次の点を目安に判断される。(1)から(3)までについては法律上の定義から直接的に導かれるもの、(4)については広範に及ぶ本法の関係者が、当該物が「容器包装」であることを容易に判断できることが求められることから、容器包装であるか否かは基本的には社会通念に沿って判断されるべきとの考え方に基づくものである。

なお、社会通念によつても、容器包装であるか否かが明確ではなく、一律に整理することの困難なケース（中仕切り、台紙、緩衝材等）については、容器包装と位置付けられなかった他のものとの関係で不公平が生じないか、法目的の一つであるごみの減量化や制度の円滑な運用を図る上で不都合はないか等の観点を考慮して判断される。

(1) 容器や包装か

<「容器包装」に該当しないものの具体例>

○容器でも包装でもないもの（物を入れても包んでもいないもの）

- ・焼き鳥の串、アイスクャンデーの棒
- ・ラップフィルムの芯、トイレトペーパーの芯
- ・ラベル（飲料等に付されているシュリンクラベル（商品名等を表示している胴巻き）を除く。）、ステッカー、シール（キャップシール、ワイン等の金属製シールを含む。）、テープ類（包んでいると認識されるもの及び袋の口を留めている等、ふたの役割をしているものを除く。）
- ・ひも、バンド（ふたの役割をしているものを除く。）
- ・釘、ピン、ホチキスの針
- ・飲料用ストロー
- ・弁当のスプーン、割り箸、お手拭き
- ・能書、説明書（容器の一部として商品の保護固定に用いられているものを除く。）
- ・のし紙（包装紙と兼用のものを除く。）
- ・乾燥剤、脱酸素剤、保冷剤
- ・フック（容器の一部として用いられるものを除く。）

<「容器包装」に該当するものの具体例>

○商品の付属品（商品の一部と解される。）の容器や包装

- ・飲料パックのストローの袋
- ・弁当のスプーンの袋、割り箸の袋、お手拭きの袋
- ・能書、説明書、保証書の袋

(2) 商品の容器や包装か

<「容器包装」に該当しないものの具体例>

①商品そのものである容器包装

- ・商品として販売されている手提げ袋、ガラスびん、紙箱、包装紙等

②商品以外の物に付された容器包装

- ・手紙やダイレクトメールを入れた封筒
- ・景品、賞品、試供品（表示等により明確に通常の商品と分けられるもの。）に付した容器や包装
- ・家庭で付した容器や包装
- ・有価証券（商品券、ビール券等）を入れた袋又は箱
- ・切符、郵便切手、入場券、テレフォンカード等の役務（サービス）の化体した証券を入れる袋
- ・金融機関等で配布される現金を入れる袋

③商品ではなく、役務の提供に伴う容器包装

- ・クリーニングの袋
- ・宅配便の容器や包装（通信販売に用いられる容器や包装を除く。）
- ・クレジット会社の会報等を入れた封筒
- ・ビデオ、CDのレンタルの際に用いられる袋

- ・フィルムのネガを入れた袋
- ・病院内で提供される薬袋

(3) 中身の商品と分離した場合に不要になるものか

<「容器包装」に該当しないものの具体例>

○通常の使用において中身の商品と分離して不要とはならないもの

(i) 持ち運びに支障を来すもの

- ・コンパクト・ディスク、ミニディスク、カセットテープのケース
- ・楽器、カメラ等のケース
- ・テニスラケットのケース
- ・電動工具のケース
- ・積木箱
- ・複数冊のポケット式アルバムをまとめて入れるケース

(ii) 保管時の安全や品質保持等に支障を来すもの

- ・コンパクト・ディスク、ミニディスク、カセットテープのケース（再掲）
- ・楽器、カメラ等のケース（再掲）
- ・書籍の外カバー
- ・電動工具のケース（再掲）
- ・着物ケース
- ・歯磨きのトラベルセットや化粧品の携帯用ポーチ
- ・ネックレス等の貴金属の保管用ケース
- ・万年筆の保管用ケース
- ・小型家電製品等（シェーバー、ドライヤー等）の収納ケース

(iii) 商品そのものの一部であるもの

- ・ボールペンの軸
- ・日本人形のガラスケース、ボトルシップのボトル
- ・硬プラスチック製の植木鉢〔皿を含む〕
- ・紅茶等のティーバッグ
- ・乾燥剤、脱酸素剤、保冷剤を直接入れた個袋
- ・付箋紙の台紙
- ・カレンダーの台紙
- ・消火器
- ・使い捨てライター
- ・レンズ付きフィルムの本体
- ・薬、薬用酒等に添付されている計量カップ
- ・洗剤等に添付されている計量カップ

<「容器包装」に該当するものの具体例>

①通常の使用において中身の商品と分離して不要となるもの

- ・玩具の空箱
- ・苗木等販売用の軟プラスチック製鉢
- ・靴の空箱

- ・家電製品等の空箱
- ・背広カバー

②商品が費消された場合に不要となるもの

- ・病院外の薬局で処方される薬の袋
- ・ポケットティッシュの個袋
- ・口紅、マスカラ、スティックのり、スティック状のリップクリームの入れ物
- ・飲料、納豆、プリン、ヨーグルト等のマルチパック
- ・目薬の携帯ケース
- ・キャラクターの形をしたシャンプーの容器
- ・キャラクターの絵が描かれたガラスびん等の容器
- ・コピー、レーザープリンターのトナー容器
- ・インスタントカメラのフィルムカートリッジ
- ・エアゾール缶
- ・防虫剤、脱臭剤の容器

(4) 社会通念上、容器包装であると概ね判断可能か

<「容器包装」に該当するものの具体例>

①容器の栓、ふた、キャップ、その他これらに類するもの

- ・PETボトルのキャップ、ガラスびんの王冠
- ・金属缶のタブ（飲み口部分のもの）、缶詰のタブ（口全体のもの）
- ・カレー粉、海苔の缶のふた
- ・デコレーションケーキの箱のふた、贈答用紙箱の上ふた
- ・名刺ケースのふた
- ・カップ焼きそばのふた、カップラーメンのふた、プリンのふた
- ・エアゾール缶のオーバーキャップ、ノズル
- ・ホームサイズシャンプー等に付属するポンプ部分
- ・住宅用洗剤等に付属するトリガー（引き金式のノズル）部分
- ・食パン等の袋の口を留めるための留め具

②中ふた

- ・液状化粧品ボトルの中ふた
- ・テニスボールケースの中ふた
- ・チューブ入り調味料の口のシール

③シール状のふた

- ・チューブ入り調味料の口のシール（再掲）
- ・紙パックストロー挿入口のシール

中仕切り、台紙等は、その使われ方が様々であることから、次の整理に従い、使用形態により、個別具体的に判断する。

<「容器包装」に該当するものの具体例>

- ①商品の保護又は固定のために使用されていると考えられるもの

- ・菓子用、贈答用箱中の台紙、中仕切り、上げ底、合紙
- ・部品用の型枠
- ・クレヨンケースの中敷
- ・消臭剤、芳香剤等のケースを組み込んだ台紙
- ・容器に入れられたワイシャツの襟部分を固定するサポーター、内側の紙
- ・容器に入れられた靴の型くずれを防ぐための詰め物
- ・パック等に入ったいちご等の露出面を覆ったフィルム
- ・缶ビール6缶を束ねるケーシング（プラスチック製器具）
- ・鮮魚や精肉のトレーに用いられる吸水シート
- ・コンビニエンスストア等で販売される弁当に用いられる透明のプラスチックフィルム

②ふた、トレーに準ずる容器包装

- ・バター等の表面を覆った紙製フィルム
- ・プリスターパックの台紙
- ・蒸し饅頭の敷き紙

<「容器包装」に該当しないものの具体例>

- 容器包装と物理的に分離されて使用されており、必ずしも当該容器包装と一体となつて物を入れ、又は包んでいるとは考えにくいもの
 - ・にぎり寿司の中仕切り（透明又は緑色のプラスチックフィルム）

発泡スチロール製及び紙製の緩衝材等は、次の整理に従い、使用形態により、個別具体的に判断する。

<「容器包装」に該当するものの具体例>

- ①商品を保護又は固定するために加工されているもの
- ②立方体状、板状であつて、商品を保護又は固定するために段ボール箱等と一体として使用され、容器の形状を構成しているもの
- ③シート状の柔らかいもので、商品を包んでいると解されるもの^(注1)
- ④果物等に用いられるネット状のもの^(注2)

<「容器包装」に該当しないものの具体例>

- 比較的小型のものが、多数段ボール箱等に詰められることにより、商品との空間を埋めているもの^(注3)

(注1) 具体的には、商品全体を包むのに要する最低面積の二分の一を超えるものは該当するものと解する。この際、ネット状の包装については、ネットの空間部分を含んでいる面積として考えるものとする。

(注2) ネット状であっても、商品を入れていると解されるため。

(注3) 商品が抜かれるとバラバラになってしまう、商品を入れている又は包んでいると解されないため。

II 「特定容器」に該当するか否かの判断の目安

1 法律上の定義及び効果

(1) 定義

この法律において「特定容器」とは、容器包装のうち、商品の容器であるものとして主務省令で定めるものをいう。（法第2条第2項）

(2) 効果

「特定容器」に該当すると、その利用事業者と製造等事業者の双方に再商品化義務が課される。（両方で再商品化義務を按分。）

2 具体的判断の目安

基本的に、I により容器包装に該当すると判断されるもののうち、商品を入れるためのものと認識されるものであり、具体的には、該当するものをその形状により主務省令の別表にて列挙。

<特定容器に該当するものの具体例>

- ・乾電池等のマルチシュリンク
- ・たばこ等のオーバーラップ
- ・ティッシュペーパー、トイレットペーパー等の集積包装
- ・スーパーマーケット、コンビニエンスストア、百貨店等で販売段階で付されるレジ袋や紙袋
- ・エアゾール製品等のシュリンクパック
- ・カップめん等のシュリンクパック
- ・飲料、乳製品等のマルチシュリンク
- ・飲料等に付されている分離不可能なシュリンクラベルで、容器の一部として使用されるもの
- ・宅配ピザの宅配に使用される紙製容器

<特定容器の一部に該当するものの具体例>

- ・容器に入れられたワイシャツの襟部分を固定するサポーター、内側の紙等
- ・容器の中に入れられている靴下に付けられている厚紙及びフック
- ・菓子箱の中で使われている合紙
- ・鮮魚や精肉のトレーに用いられる吸水シート
- ・容器の中に入れられ商品を固定している発泡スチロール製の型枠
- ・容器の中に入れられ商品を保護しているエアークッション

※用語の説明については後述のⅢの2を参照

Ⅲ 「特定包装」に該当するか否かの判断の目安

1 法律上の定義及び効果

(1) 定義

この法律において「特定包装」とは、容器包装のうち、特定容器以外のものをいう。
(法第2条第3項)

(2) 効果

「特定包装」に該当すると、その利用事業者のみに再商品化義務が課される。

2 具体的判断の目安

基本的に、Ⅰにより容器包装に該当すると判断されるもののうち、Ⅱの特定容器以外のもの。具体的には、商品を包むものと認識されるもの。包装により包まれている商品の面積が商品全体を包むのに要する最低面積の二分の一を超えるものが該当。

<特定包装に該当するものの具体例>

- ・デパート等の小売段階で商品を包む包装紙
- ・生鮮食料品にトレーと同時に用いられるラップフィルム
- ・ハンバーガー、キャラメル、石鹸等の個包装紙
- ・飴等の個包装に用いられる端をひねってある紙やプラスチックフィルム
- ・コンビニエンスストア等で販売される弁当を包むストレッチフィルム
- ・鉛筆や乾電池等に用いられるスリーブ（両端開放）状のシュリンクパックやストレッチフィルム
- ・板ガム、チョコレートの胴巻き
- ・缶ビール6缶を束ねるスリーブ（両端開放）状の紙製包装
- ・ペットボトルの分離可能なシュリンクラベル（商品名を表示している胴巻き）
- ・缶詰の分離可能なラベル
- ・家具等の販売の際に使われるエアークッション（容器の中に入れられ商品の保護を目的としているものを除く。）

<特定包装に該当しないものの具体例>

- ・野菜の結束用テープ
- ・靴下の帯状ラベル
- ・ビールびんのラベル

(※用語の説明)

シュリンクパック：

熱で収縮させたプラスチックフィルムによる容器包装

マルチシュリンク（パック）：

複数商品のシュリンクパック

集積包装：

複数商品をシュリンクパック以外の手法で束ねたもの

ストレッチフィルム：

手あるいは機械で伸ばし広げて使用されるプラスチックフィルム

合紙：

2段3段重ねの商品の間に敷いた紙

分離可能なシュリンクラベル：

シュリンクラベルにミシン目を入れる等、消費者が器具等を使用せずに容易に取り

外せるもの

※主務省令（容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律施行規則）
別表第一（第一条関係）

一	商品の容器のうち、主として鋼製のものであって、次に掲げるもの (一) 缶（カップ形のものを含む。） (二) (一)に掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器 (三) 容器の栓、ふた、キャップその他これらに類するもの
二	商品の容器のうち、主としてアルミニウム製のものであって、次に掲げるもの (一) 缶（カップ形のものを含む。） (二) チューブ状の容器 (三) 皿 (四) (一)から(三)までに掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器 (五) 容器の栓、ふた、キャップその他これらに類するもの
三	商品の容器のうち、主としてガラス製のもの（ほうけい酸ガラス製のもの及び乳白ガラス製ものを除く。） であって、次に掲げるもの (一) 瓶 (二) カップ形の容器及びコップ (三) 皿 (四) (一)から(三)までに掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器 (五) 容器の栓、ふた、キャップその他これらに類するもの
四	商品の容器のうち、主として段ボール製のものであって、次に掲げるもの (一) 箱及びケース (二) (一)に掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器 (三) 容器の栓、ふた、キャップその他これらに類するもの
五	商品の容器のうち、主として紙製のものであって次に掲げるもののうち、飲料を充てんするためのもの（原料としてアルミニウムが利用されているもの及び四の項に掲げるものを除く。） (一) 箱及びケース (二) (一)に掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器
六	商品の容器のうち、主として紙製のものであって、次に掲げるもの（四及び五の項に掲げるものを除く。） (一) 箱及びケース (二) カップ形の容器及びコップ (三) 皿 (四) 袋 (五) (一)から(四)までに掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器 (六) 容器の栓、ふた、キャップその他これらに類するもの (七) 容器に入れられた商品の保護又は固定のために、加工、当該容器への接着等がされ、当該容器の一部として使用される容器
七	商品の容器のうち、主としてポリエチレンテレフタレート製のものであって次に掲げるもののうち、飲料又はしょうゆを充てんするためのもの (一) 瓶 (二) (一)に掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器

八	<p>商品の容器のうち、主としてプラスチック製のものであって、次に掲げるもの（七の項に掲げるものを除く。）</p> <ul style="list-style-type: none"> (一) 箱及びケース (二) 瓶 (三) たる及びおけ (四) カップ形の容器及びコップ (五) 皿 (六) くぼみを有するシート状の容器 (七) チューブ状の容器 (八) 袋 (九) (一) から (八) までに掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器 (十) 容器の栓、ふた、キャップその他これらに類するもの (十一) 容器に入れられた商品の保護又は固定のために、加工、当該容器への接着等がされ、当該容器の一部として使用される容器
九	<p>商品の容器のうち、一から八までの項に掲げるもの以外ののものであって、次に掲げるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> (一) 箱及びケース (二) 瓶 (三) つぼ及びかめ (四) たる及びおけ (五) カップ形の容器及びコップ (六) 皿 (七) チューブ状の容器 (八) 袋 (九) (一) から (八) までに掲げるものに準ずる構造、形状等を有する容器 (十) 容器の栓、ふた、キャップその他これらに類するもの

IV 「分別基準適合物」に該当するか否かの判断の目安

1 法律上の定義及び効果

(1) 定義

この法律において「分別基準適合物」とは、市町村が法第8条に規定する市町村分別収集計画に基づき容器包装廃棄物について分別収集をして得られた物のうち、環境省令で定める基準に適合するものであって、主務省令で定める設置の基準に適合する施設として主務大臣が市町村の意見を聴いて指定する施設において保管されているもの（有償又は無償で譲渡できることが明らかで再商品化をする必要がない物として主務省令で定める物を除く。）をいう。（法第2条第6項）

(2) 効果

「分別基準適合物」についてのみ、事業者に再商品化義務が発生する。

2 具体的判断の目安

法律上の定義から直接的に導かれる次の4つの要件を満たす物が「分別基準適合物」に該当。

- ① 市町村が、容器包装リサイクル法に基づき市町村分別収集計画を策定し、同計画に従

- って、分別収集を実施して得られた物のうち、
- ② 分別基準（環境省令にて規定）に適合するものであって、
 - ③ 保管施設の設置の基準（主務省令にて規定）に適合する施設として主務大臣が市町村の意見を聴いて指定する保管施設において保管されているもので、
 - ④ ①～③の要件を満たせば、有償又は無償で譲渡できることが明らかで再商品化する必要がない物として主務省令で指定したもの^(注5)以外のもの。

(注5) 主務省令において、主として鋼製の容器包装に係る物、主としてアルミニウム製の容器包装に係る物、主として段ボール製の容器包装に係る物及び主として紙製の容器包装であって、飲料を充てんするための容器（原材料としてアルミニウムが利用されているもの及び主として段ボール製の物を除く。）に係る物が指定されている。

V 「特定分別基準適合物」に該当するか否かの判断の目安

1 法律上の定義及び効果

(1) 定義

この法律において「特定分別基準適合物」とは、主務省令で定める容器包装の区分（以下「容器包装区分」という。）ごとに主務省令で定める分別基準適合物をいう。（法第2条第7項）

(2) 効果

「特定分別基準適合物」ごとに、再商品化義務量は算定される。

2 具体的判断の目安

分別基準適合物（＝再商品化義務の対象物）を容器包装区分ごとに（＝容器包装の種類別に、例えば、PETボトル、無色のガラスびん等の別に）分けたものを指す。

具体的には、主務省令にて列挙。それぞれの容器包装が具体的にどの容器包装区分に分類されるかについては、主として何製であるかによることとしており、当該容器包装を構成する素材のうち重量ベースでもっとも主要なものに分類する。

<具体例>

- ・全体重量が100gの容器包装においてプラスチック部分が60g、紙部分が40gの複合素材（分離不可能）の場合、当該容器包装は重量が100gのプラスチック製容器包装とする。
- ・全体重量が100gの容器包装においてプラスチック部分が30g、紙部分が40g、その他の素材部分が30gの複合素材（分離不可能）の場合、当該容器包装は重量が100gの紙製容器包装とする。

VI 「特定容器利用事業者」又は「特定容器製造等事業者」に該当するかの判断の目安 （「インプラント」に関する判断基準）

1 法律上の定義及び効果

(1) 定義

この法律において「製造等」とは、特定容器を製造等する行為（他の者の委託（主務省令で定めるものに限る。）を受けて行う者を除く。）（法第2条第10項第1号、2号及び3号）

(2) 効果

容器包装リサイクル法上の「製造等」に該当すると、特定容器製造等事業者となり、自ら製造等した容器について再商品化の義務が発生する。

2 具体的判断の目安

「インプラント」に関する判断基準として次の①から③に基づいて特定容器利用事業者又は特定容器製造等事業者であるかの判断を行う。

- ① 特定容器利用事業者より依頼を受けて、印刷やラミネート等の加工が施されたプラスチックのフィルム若しくはシート又は印刷やラミネート等の加工が施された原紙のロール又はシートを特定容器利用事業者が包材メーカーから購入して利用する場合は、包材メーカー（特定容器利用事業者より依頼を受けた事業者）が特定容器製造等事業者である。
- ② 無地のプラスチックのフィルム若しくはシート又は無地の原紙のロール又はシートを包材メーカーが特定容器利用事業者の規格に従い、スリット、裁断等の加工を行い、納入して販売した場合には、包材メーカー（特定容器利用事業者より依頼を受けた事業者）がその特定容器製造等事業者である。
- ③ 特定容器利用事業者が、無地のプラスチックのフィルム若しくはシート又は無地の原紙のロール又はシートをメーカーより購入し、そのまま使用する場合又は自ら印刷、スリット等を施して利用する場合は、特定容器利用事業者が特定容器製造等事業者である。

(※用語の説明)

インプラント：特定容器利用事業者が工場内で容器を製造している場合。例えば、プラスチック製フィルムを原反で購入した食料品メーカーが工場内でそれを基に製袋し、容器となして商品化している場合を指す。

食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律について

(平成12年法律第116号。平成13年5月1日施行。)

1 趣旨

食品の売れ残りや食べ残しにより、又は食品の製造過程において大量に発生している食品廃棄物について、発生抑制と減量化により最終的に処分される量を減少させるとともに、飼料や肥料等の原材料として再生利用するため、食品関連事業者（製造、流通、外食等）による食品循環資源の再生利用等を促進する。

2 法律の概要

(1) 基本方針の策定等

- ① 主務大臣は、食品循環資源の再生利用等を総合的かつ計画的に推進するため、基本方針を定める。基本方針では、再生利用等を実施すべき量に関する目標を、平成18年度までに20%と定めている。

食品循環資源	: 食品廃棄物であつて、飼料・肥料等の原材料となるなど有用なもの
再生利用	: 食品循環資源を飼料・肥料・油脂及び油脂製品・メタンとして利用し、又は利用する者に譲渡すること
再生利用等	: 再生利用、発生抑制、減量（乾燥・脱水・発酵・炭化）

- ② 国は、食品循環資源の再生利用等を促進するために必要な資金の確保、情報の収集、整理及び活用、広報活動等に努めるものとする。

(2) 食品関連事業者による再生利用等の実施

- ① 食品関連事業者は、主務大臣が定める判断の基準となるべき事項に従い、再生利用等に取り組むものとする。判断の基準となるべき事項では再生利用等の実施の原則、発生抑制の方法、特定肥飼料等の製造基準等について定める。
- ② 主務大臣は、食品関連事業者に対し、必要があると認めるときは、指導、助言を行うことができるものとする。
- ③ 主務大臣は、再生利用等が基準に照らして著しく不十分であると認めるときは、食品関連事業者（年間の食品廃棄物等の発生量が100トン以上のもの）に対し、勧告、公表及び命令を行うことができるものとする。

(3) 再生利用を実施するための措置

- ① 食品循環資源の肥飼料化等を行う事業者についての登録制度を設け、委託による再生利用を促進。この場合、廃棄物処理法の特例等（運搬先の許可不要、料金の上限規制をやめ事前の届出制を採用、差別的取扱の禁止）及び肥料取締法・飼料安全法の特例（製造・販売の届出不要）を講ずる。
- ② 食品関連事業者が、農林漁業者等の利用者や肥飼料化等を行う者と共同して再生利用事業計画を作成、認定を受ける仕組みを設け、三者一体となった再生利用を促進。この場合、廃棄物処理法の特例等及び肥料取締法・飼料安全法の特例を講ずる。